

日本18世紀学会第31回全国大会
プログラム
報告要項

2009年6月20日(土)、21日(日)

多摩美術大学
八王子キャンパス
〒192-0394 東京都八王子市やりみず鐘水2-1723

第 31 回大会プログラム

第 1 日 6 月 20 日 (土)

発表会場 レクチャーホール 3 階 301 教室 (24-301)

9:30 受け付け開始

10:00-10:05 開会挨拶

自由論題報告

10:05-10:55 自由論題報告 (1)

「言語から見たベルリン科学・文学アカデミー、1746-66 年」
有賀 暢迪 (京都大学 日本学術振興会特別研究員)
司会：赤澤 元務 (千葉工業大学)

10:55-11:45 自由論題報告 (2)

「シュライアマハー解釈学における予見 (Divination) の方法の歴史的系譜
—— Fr・A・ヴォルフおよび Fr・シュレーゲルという二人の Kritiker の視点から」
桑原 俊介 (東京大学)
司会：平山 敬二 (東京工芸大学)

11:50-13:00 総会+昼食*

初めに韓国 18 世紀学会会長 鄭 珉 Jung Min 氏 (漢陽大学校人文科学部国文科教授・韓国学研究所所長) のご挨拶があります。

総会会場 レクチャーホール 3 階 301 教室 (24-301)

昼食 20 日 (土) レクチャーホール 3 階 301 教室 (24-301)

および グリーンホール内東学食堂の一部

21 日 (日) グリーンホール内東学食堂の一部

13:10-14:00 自由論題報告 (3)

「アルガロッティとフリードリッヒ大王 —— 『オペラ論』をめぐって」
近藤 裕子 (東洋大学)
司会：弓削 尚子 (早稲田大学)

14:00-14:50 自由論題報告 (4)

「モーツァルトのオペラ・ブッフアとゴルドーニ
—— オペラ・ブッフア《愚か娘になりすまし》を中心に」

大崎 さやの (東京大学)

司会：中川 さつき (京都産業大学)

14:00-15:10 コーヒー・ブレイク

レクチャーホール 2階 203教室 (24-203) にお茶をご用意します。

15:10-16:00 自由論題報告 (5)

「18世紀フランスの彫刻表現 —— ヴァトーとファルコネを中心に」

杉山 奈生子 (名古屋大学)

司会：木村 三郎 (日本大学)

16:20-17:20 コンサート

会場 レクチャーホール 2階 Aホール (24-201)

コンサート「18世紀フランスバロックの巨匠 J.Ph.ラモーをめぐって」

司会・解説：小穴 晶子 (多摩美術大学)

出演：フルート：岩下 智子 (特別ゲスト、東京芸術大学、同大学院修士課程を修了。ドイツ学術交流会 (DAAD) 奨学生として、デットモルト音楽大学に留学。1988年イタリア、トリエステ・デュイーノ国際コンクール第2位。2007年フォンテック社から CD『フランスの香り』をリリース)

バロックヴァイオリン：小穴 晶子 (多摩美術大学)

チェンバロ：瀬尾 文子 (東京大学)

曲目：1) J.-F. Rebel : 『ヴァイオリンソナタ第7番』 から第1楽章 (アルマンド)

2) J.Ph. Rameau : 『コンセール形式によるクラヴサン曲集』

第1番 全楽章、第4番から 第3楽章

3) J.S.Bach : 『音楽の捧げもの』 (BWV1079) から

トリオ・ソナタ 第2楽章 (アレグロ)

4) J.Ph. Rameau : 『コンセール形式によるクラヴサン曲集』

第3番 全楽章

18:15-20:15 懇親会

会場 セレス相模原 3階 (会場名は未定です)

会費 5000円

第2日 6月21日(日)

発表会場 レクチャーホール 3階 301教室(24-301)

9:30 受け付け開始

自由論題報告

10:00-10:50 自由論題報告(6)

「18世紀後半ドイツ・プロテスタント圏におけるカトリック文化受容
——セポルクロ・オラトリオの流行とその思想的背景——」

瀬尾 文子(東京大学)

司会: 荒川 恒子(山梨大学)

共通論題 「帝国」

11:00-11:15 趣旨説明

コーディネーター兼総合司会

長尾 伸一(名古屋大学)

11:20-12:00 基調報告

「18世紀と「帝国」」

長尾 伸一(名古屋大学)

12:00-13:00 昼食*

13:00-13:35 第2報告

「ローマの影: 18世紀フランスの歴史叙述における「帝国」の変貌」

王寺 賢太(京都大学人文科学研究所)

13:35-14:10 第3報告

「近世ヨーロッパ宮廷論の射程」

大津 留厚(神戸大学大学院人文学研究科)

14:10-14:45 第4報告

「ロシア帝国の形成・発展と西欧的学知の受容」

橋本 伸也(関西学院大学)

14:45-15:20 第5報告

牛 貫傑 (清朝関係の発表を予定しております)

15:20-15:35 コーヒー・ブレイク (質問書回収)

レクチャーホール 2階 203教室 (24-203) にお茶をご用意します。

15:35-16:35 討論

16:50 閉会挨拶

* 昨年の大会より、大会参加費として**500円** (ただし学生は**無料**)、非会員の方は**1000円**をいただいております。ご了承ください。

* **20日(土)、21日(日)のお弁当をご希望の方はお申し込みください。**

土曜日は、学生食堂 (絵画棟 1階イイオ食堂、グリーンホール内東学食堂) がご利用いただけます。グリーンホール内東学売店では、サンドイッチ、おにぎり程度は購入できます。

日曜日は、学食、売店共に閉まっております。また、大学近辺には飲食店はございませんので、お弁当を申し込まれることをおすすめいたします。

お弁当代：1000円

* 大会参加の際、保育所、ベビーシッターを利用される場合は、学会にて保育費の半額を負担いたします。ご希望の方は、学会終了後領収書を事務局までお送りください。後日学会負担分をお振込みいたします。

言語から見たベルリン科学・文学アカデミー、1746-66 年

有賀 暢迪

(京都大学・日本学術振興会特別研究員)

十八世紀のヨーロッパを特徴付ける科学史上の特色は、各地に設立された科学協会・科学アカデミーの活発な活動である。これらの組織の会合では、会員たちがそれぞれの研究内容について報告し合い、その成果は雑誌（紀要）論文の形で出版されて、ヨーロッパ各地に伝えられた。科学協会・科学アカデミーは情報網の結節点であり、理念的共同体としての文芸共和国が具体化する場であった。

ところで、十八世紀という時代はまた、ラテン語やフランス語による汎ヨーロッパ的な学術文化から、フランス語・英語・ドイツ語など各国語の学術文化が並立する時代へと移行していく過渡期にあたっている。この観点から見て非常に興味深いのが、1746年に発足したベルリン科学・文学アカデミーである。このアカデミーは、プロイセン王フリードリヒ二世の意向により、総裁にフランス人学者モーペルテュイを招聘し、出版物もフランス語で出されていた。それゆえこの組織はフランス語の文芸共和国の一部であったように見えるが、アカデミーの会合記録からは、それとは少し異なった姿が浮かび上がってくる。

本報告では、ベルリン・アカデミーの議事録（発足時からの 20 年分が校訂出版されている）をもとに、主として使用言語という観点からアカデミーの活動を分析する。実のところ、この会合でなされた研究発表のうち、フランス語でなされたものは六割程度であり、残りはラテン語とドイツ語であった。興味深いことに、ドイツ語での発表は発足当初はわずかしかなかったが、少しずつ数を増やし、総裁モーペルテュイが 1759 年に没した後の数年間には、ドイツ語の使用がかなり容認されていた様子さえ認められる。ただしこの傾向は、1764 年に国王フリードリヒが会員の人選に介入するに及んで後退し、フランス語が再び支配的となった。また、こうした変遷の一方で、ラテン語は少しずつ使用されなくなっていった。

十八世紀中葉のベルリン・アカデミーでは、フランス語が主流を占めていたのは確かであるが、決して排他的な地位にあったわけではない。むしろそこには、ドイツ語が自立した学問用語となっていく素地すら垣間見ることができる。報告ではこうした点を論じるとともに、余裕があれば、会合の内容と実際に出版された紀要との比較も行いたい。

シュライアマハー解釈学における予見 (Divination) の方法の歴史的系譜
——Fr・A・ヴォルフおよび

Fr・シュレーゲルという二人の Kritiker の視点から

桑原 俊介
(東京大学)

シュライアマハーの解釈学は、解釈を著者の心的制作過程に基礎づける主観的・心理主義的解釈学としての偏った評価を与えられてきた。その一因に挙げられるのは、彼の予見 (Divination: 語源は *deus* による靈感) の方法が殊更強調された点にある。例えばガダマーは、シュライアマハー解釈学の最大の特徴が予見の方法にあるとし、それを「共感」に基づく著者の心的制作過程への素朴な自己移入 (*Sich-hineinversetzen*) として理解し、シュライアマハー解釈学を心理的・ロマン主義的解釈学として歴史的に限界づける。だがシュライアマハーの予見概念は、自身も記す通り、批判 (*Kritik*) における伝統的な方法概念から採られたものであり、かかる歴史的系譜から捉え返すならば、予見の方法には単なる自己移入には還元され得ない、より学問的に洗練された含意のあることが明らかとなる。本発表では、シュライアマハー自身が指摘する、二つの批判からの系譜に注目したい。それは、Fr・A・ヴォルフの本文批判 (*Textkritik*) ならびに Fr・シュレーゲルの文学批評 (*literarische Kritik*) という二つの異なるクリティークである。

人文主義以来、本文批判における予見は靈感 (*inspiratio*) や天才 (*ingenium*) と結びつけられる卓越した「推測」の能力と解され、特に写本の修復や修正 (*restitutio, emendatio*) に関わる概念として用いられてきた。ヴォルフは (ロマン主義の影響下で) 予見が「空想」や「感情」に基づくとしながらも、*ingenium* を判断 (*judicium*) に結びつけるなど、予見の方法をより学問的に洗練された方法概念と化す。例えば彼は本文批判の方法を「文書に基づく方法」と「予見的方法」とに分け、両者を相補的な方法として整備する。この二分法はシュライアマハー解釈学の「比較の方法」と「予見の方法」との相補的な規定の素型をなす。またヴォルフ自身は予見を自己移入として定式化しないが、彼の「解釈学」には (予見概念は用いられないが) 自己移入の記述が散見される。そこでの自己移入は、感情移入・共感・忘我・没入等ではなく、著者およびその歴史的条件を、確かな知識に基づく推測を交えつつ歴史的・相対的に捉え返すことを意味する。シュライアマハーは、ヴォルフの本文批判における予見と、彼の解釈学における自己移入とを総合する形で、予見の方法を、歴史主義的な意味での自己移入の方法として自らの解釈学に導入したと推定される。

また予見概念は時間的契機を含む。シュレーゲルはロマン的文学を「発展的=進展的 (*progressiv*)」文学として特徴づけ、その特性描写のためには、その未来像を先取りする「予見的批評」が不可欠であるとする。このようなシュレーゲルの文学批評に見られる予見概念の規定が、著者の思考 (および言語) の未来における展開を「予感 (*ahnden*)」することを求めるシュライアマハー解釈学の「予見的追構成

(divinatorisches Nachkonstruieren)」の論理へと流れ込んでいる。

総じて予見とは、確かな歴史的知識に裏打ちされた高度な推測の技術であり、それは比較という歴史的検証作業との相補関係を保ちながら著者の思考と言語とを、未来像を含むその全体において追構成する方法であると結論される。そしてこのことは、シュライマハー解釈学における追構成 (Rekonstruktion) の論理が、失われたオリジナルテキストの復元 (restitutio) という、本文批判におけるテキストの全体性の回復という論理から強い示唆を受けていることを窺わせるものでもある。

アルガロッチェとフリードリッヒ大王——『オペラ論』をめぐって

近藤 裕子
(東洋大学)

フリードリッヒ大王は青年時代に父王との確執はあったが、文武両道に秀で、18世紀を代表する啓蒙君主としてプロイセンの興隆に尽力した。ヴェネツィア生まれのアルガロッチェは、彼自身にとってのグランドツアーといえるフランス・イギリスへの旅のち、このフリードリッヒの宮廷に伺候することになった。当時のイギリスにおいて、大陸へのグランドツアーは貴族の子弟教育最終段階の仕上げとして行うことが一般的であり、ブームとなっていた。アルガロッチェにとってのイギリス行きはまさにこの一般的とは逆ベクトルのグランドツアーと考えられるのである。

アルガロッチェには『オペラ論』と呼ばれる著作があり、英・独・仏語に翻訳されて注目を集め、グルックら、その後のオペラ界に影響を与えたと言われている。この著作にはイピゲネイアをモチーフにした台本がつけられているが、単なる付録以上のさまざまな興味を呼び起こすものとなっている。フリードリッヒ大王はベルリンに歌劇場を建て、グラウンらにオペラを上演させた。自らも台本製作に関わるなど、その情熱には並々ならぬものが感じられる。フリードリッヒの姉、ヴィルヘルミーネもまた、嫁ぎ先のバイロイトに劇場を建てることになる。フリードリッヒのオペラ好きなくして、またヴィルヘルミーネとフリードリッヒの姉弟間の情愛なくして、アルガロッチェはこの本を完成させることはできなかった。

アルガロッチェが彼自身のグランドツアーで学んだことは、プロイセン、またザクセンの宮廷に滞在することを通して花開くことになる。音楽を手がかりの1つとして、フリードリッヒ大王とアルガロッチェの関わり、また後者の美意識形成のプロセスについて論じたい。

モーツァルトのオペラ・ブッフアとゴルドーニ
— オペラ・ブッフア《愚か娘になりすまし》を中心に

大崎 さやの
(東京大学)

モーツァルトのオペラ・ブッフア《愚か娘になりすまし》(高橋英郎氏による訳語。従来《見てくれのばか娘》等と訳されてきた)は、ヴェネツィア出身の劇作家カルロ・ゴルドーニによるリブレットを、ウィーンの宮廷詩人マルコ・コルテッリーニが書き直したものを採用している。ゴルドーニの台本も、もとはフランスの劇作家デトゥーシュによる1734年の喜劇『偽のアニエスまたは田舎の詩人』という、当時イタリアでも翻訳され、よく知られた作品を真似たものだった。このゴルドーニの台本は、ゴルドーニがヴェネツィアを去って、パリのイタリア座の座付き作家として活動していた時期に書かれ、祖国で上演するためヴェネツィアに送られた。ヴェネツィア初演は1764年、ペリッロ作曲によるものだった。この上演は一回きりで、あまり成功したとはいえないものだったらしい。

モーツァルトが12歳にして初めて本格的にオペラ・ブッフアに取り組んだのは、この《愚か娘になりすまし》においてであった。数々の困難を経て1769年にザルツブルク大司教の宮廷で初演されたことは、すでに良く知られているところであるが、本発表ではゴルドーニによる原作台本とコルテッリーニによる台本を比較、ゴルドーニ台本の独自性を明らかにすると同時に、コルテッリーニ版における変更点について、その変更の理由を考察したい。さらに《愚か娘になりすまし》以外の、たとえば《ドン・ジョヴァンニ》等のモーツァルトのオペラ・ブッフアのリブレットと、ゴルドーニ作品との関連性にも迫り、モーツァルトのオペラ・ブッフアに見られるゴルドーニの影響を探ってみたい。

18 世紀フランスの彫刻表現——ヴァトーとファルコネを中心に

杉山 奈生子
(名古屋大学)

本発表は、18世紀フランス美術における生々しい彫刻を巡る言説と表象について、主に画家ジャン＝アントワーヌ・ヴァトー（1684-1721）と彫刻家エティエンヌ＝モーリス・ファルコネ（1716-1791）の作品を中心に考察するものである。

ヴァトーの雅宴画（*fêtes galantes*）では雅な紳士淑女が音楽や舞踏、恋愛に興じる場面が展開されるが、そこにしばしば描かれる庭園彫刻について、発表者は様々な視点から調査・研究を行ってきた¹。特に、恋愛の主題に相応しいウェヌスやニンフの「生きているかのような」表現は、同時代の美術理論や美術受容を反映していると思われる。彫刻を模写する場合、素材としての石を描くのではなく、彫像を通してその肉体を描くべきであると説いたルーベンスの「古代彫刻模倣論」は、ロジェ・ド・ピール著『絵画原理講義』（1708年）に所収され、ヴァトーが参照した文献と考えられる。また、ヴァトーの《シテール島への船出》等に見られるウェヌス像は、ビスホッフによるウェヌス像の版画（Jan de Bischoff, *Signorum veterum icones*, no. 76, 1669）と形態的な類似が認められる。後者は、愛好家自らが愛で楽しみながら石から肉へと変容させる作用を意図した一連の古代彫刻版画集に属していることから、ヴァトーの生々しい彫像についても同様の受容の在り方が想定される。

さらに、愛という強い感情によって石像から生身の女性への変容を叶えたピュグマリオン神話は、ルネサンスや17世紀に比べて18世紀に非常に好まれ、関連する諸芸術作品が数多く作られた。ディドロは、ファルコネの彫刻《自らの彫像の足下にひざまづくピュグマリオン》のサロン評（1763年）において、ガラテア像の柔らかい肉の表現を絶賛すると同時に、ピュグマリオンと彫像が接触する「哲学的群像」を提案した。これ以降、ラグルネの絵画《ピュグマリオン》（1781年）に見られるように、ピュグマリオンと肉体を得たガラテアが触れ合う作品が登場している。また、ファルコネは『百科全書』の「彫刻」の項目（1765年）において、肉体を模倣する場合、石の冷たさではなく、生々しい性質等を再現すべきであると説明している。この他にも彫刻を巡る当時の美術理論や美術批評、美術受容といった、美術作品を取り巻く言説を絵画・彫刻作品とともに提示することで、18世紀フランスの様々な領域で彫刻表現がどのように扱われていたかを浮き彫りにしたい。

¹ 杉山奈生子『アントワーヌ・ヴァトーの雅宴画における彫刻表現について』（課程博士論文）、名古屋大学大学院文学研究科、2005年
（「名古屋大学学術機関リポジトリ」登録 URI : <http://ir.nul.nagoya-u.ac.jp/dspace/handle/2237/11188>）

18 世紀後半ドイツ・プロテスタント圏におけるカトリック文化受容 —— セポルクロ・オラトリオの流行とその思想的背景

瀬尾 文子
(東京大学)

本発表は、一般に「衰退期」とされている 18 世紀後半のドイツ・プロテスタント音楽の側面に光をあて、19 世紀以降の市民社会における幅広い宗教音楽受容を用意する重要な動向がこの時代にあったことを明らかにするものである。

それは、プロテスタント地域におけるカトリック文化の受容である。巷で教会音楽の「墮落」が言われていた当時、啓蒙思想の普及を背景に「真の教会音楽」なる理念が生まれ、イタリア・ルネサンスの教会音楽がその理想像として主張された。だが、作曲上でのこの理念の実践は、純粋な礼拝音楽よりも、礼拝外の教化音楽であったオラトリオのジャンルで顕著に見られる。

ここではその一種、セポルクロ・オラトリオに着目する。キリストの死と復活を象徴する聖墳墓をめぐる受難の出来事を回想するという独特のストーリー設定を持つこのオラトリオは、元々は 17 世紀後半のヴィーン宮廷独自の受難音楽だったが、1719 年にハプスブルク家からザクセン公国に嫁いだ王妃がその演奏習慣をドレスデン宮廷に持ち込んだのをきっかけに、アルプス以北でも広まり始めた。とりわけハッセ作曲・パッラヴィチーノ作詞の《主の墓への巡礼者たち》は、ドイツ語版やピアノ伴奏譜の出版を通じてライプツィヒを中心とするプロテスタント地域にも普及した。さらに、この作品を下敷きにしたツァハーリエの詩《ゴルゴタの丘の巡礼者たち》(1756 年ブラウンシュヴァイクにて出版) は、ベルリンのシュナイダー、ビュッケブルクのバッハラによって作曲された。18 世紀後半にプロテスタント圏で作曲・演奏されたセポルクロ・オラトリオは他にも多数ある。

個々の作品にはそれなりの先行研究があるが、そもそもカトリック的な要素の強いセポルクロ・オラトリオがいかなる理論的基盤を得てプロテスタント地域で受容されたかについては、十分な考察がなされていない。本発表はその部分を「真の教会音楽」理念との連関から論じる。その際、思想面で中心的役割を果たした人物として、近代音楽ジャーナリズムの先駆者 J. A. ヒラーに注目する。彼はトーマス・カントール及びゲヴァントハウス・コンサートの企画者としてライプツィヒの音楽文化に実質的に深く関わる一方で、フランスの音楽理論を積極的に独訳し大衆に紹介した。ヒラーは上記ハッセ作品のピアノ伴奏版の編集者である。彼の中で宗派の違いの問題がどう解決していたのかを探りたい。

18 世紀と「帝国」

長尾 伸一
(名古屋大学)

18 世紀啓蒙の文化圏はフランスを中心としながら、ヨーロッパ全域に広がっていた。それはさまざまな文化的、制度的枠組みに支えられていた。いまだに学術言語として使用されていたラテン語に加え、フランス語がラテン語に事実上代替する国際語として重きをなし、人的交流の手段となっていた。国家が設立したアカデミーから科学者団体やサロン、クラブなどの国際的ネットワークが発展し、編集者、出版業者も国境を越えて活躍していた。同時期の東アジアにおいても、小規模だが清朝、朝鮮王朝、日本、ヴェトナム、琉球王朝の間に、中国語を用いた儒者たちの交流圏が存在し、その中では同時期のヨーロッパの文化や学問や技術も議論されていたことが判明している。国民国家形成以前の 18 世紀の思想・文化は、このような国際的広がりの中でとらえるのが望ましいが、それぞれの地域に内在した研究が深化する中で、それはかならずしも容易ではない。今回の共通論題では「帝国」を一つのキー・ワードとして取り上げ、各国研究を超えた 18 世紀研究の枠組みを探求してみる。

啓蒙の文化圏は衰退した（西）ローマ帝国の普遍性とは異なった形で、知識人の新しい普遍性を確立しようとしたように見えるが、そればかりでなく、18 世紀にはまだドイツ語圏を中心に、神聖ローマ帝国が存在していた。現在その役割は再評価されつつある。東方で 18 世紀に強大化するロシア帝国は東ローマ帝国の継承者をうたい、18 世紀後半にはハプスブルク家のオーストリアとともに啓蒙文化の保護者となった。また 18 世紀のヨーロッパは諸国家が政治的、経済的、軍事的に競争し合った国民国家の揺籃期でもあった。比較的平穏だった東アジアの国際関係とは違い、プロイセン国家の勃興とオーストリアとの抗争、バルト海地域の支配をめぐる戦いとポーランド分割など、19 世紀を予告する戦争が行われた。とくに世界を舞台に展開されたフランスとイギリスの対立は、後者による世界的な「植民地帝国」の確立と、アメリカの独立によるその再編、フランス王国の破綻と革命へと展開して、それぞれの国での国民意識の勃興を引き起こし、啓蒙の時代が終わりを告げることになる。その点では、西ヨーロッパにおける「18 世紀」は、「帝国」をのりこえ、主権国家分立体制の確立へと進んだ世紀とも考えられる。だが他方で政治理念上では、それはいまだ機能を失っていなかった。

共通論題では 18 世紀の新旧さまざまな「普遍性」を体現する、現存した、あるいは夢想の「帝国」をめぐる諸問題を、現在の歴史学の研究成果をもとに確認し、それを共有する中で、18 世紀を考察する総合的な視点を探っていく。具体的には、神聖ローマ帝国、ロシア帝国に東アジアの清朝を加え、ブリテンの事実上の世界帝国やフランスの表象の帝国と対比しながら議論する。

ローマの影

： 18 世紀フランスの歴史叙述における「帝国」の変貌

王寺 賢太

(京都大学人文科学研究所)

18 世紀のフランス人にとって、「帝国 l' Empire」あるいは「普遍君主政 la monarchie universelle」とは、なによりも古代ローマが体現するものであり、また教会の精神的な権威とともにキリスト教圏の統一をすべる世俗的な権威であった。この時代の歴史叙述において、「帝国」の位置づけが議論の焦点となったのも、その古代的・キリスト教的な形象に、近代フランスの君主政の規範を認めるかいなかが決定的な分岐点をなしたためだ。その議論のありさまは、世紀の前半に、ローマとフランスの間に神学的ないし法的な連続性を見いだすことで、王の絶対的権力とヨーロッパの盟主の座への要求を正統化した「ロマニスト」(ボシュエ、デュボスら)と、逆にローマとフランスの間の歴史的断絶を強調することで、王国をヨーロッパの国際秩序のなかに位置づけ、王の権力を国内の諸身分の勢力均衡によって緩和することを目指した「ゲルマニスト」(ブーランヴィリエ、ダルジャンソン、モンテスキューら)の間の論争に確認される。その背景には、ルイ十四世の絶対主義・拡張主義に対する評価と、神聖ローマ帝国とフランス王国の対立関係が存在していた。

18 世紀フランスで歴史叙述上の主潮流となったのは、「帝国」というローマの影を払拭し、そこに近代の君主政の自由の歴史的な条件を認めようとしたゲルマニストたちの主張である。しかし、ヨーロッパ諸国民の世界通商と植民地経営が飛躍的に拡大したこの世紀、「帝国」の形象は、かつてのローマ帝国をはるかに越え出る新たな姿で回帰する。世紀中盤以来、ヴォルテールやレナルが試みた地球規模での歴史叙述は、そうしたヨーロッパの置かれたコンテクストの変容に相即しているのだ。とくに、七年戦争を通じてイギリスのアジア・アフリカ・アメリカでの覇権が確立された後、その「海の普遍君主政」は、商業の時代における新たな統治のモデルとしてだけでなく、近代ヨーロッパの自由が生み出したローマ的専制の回帰として批判的考察の対象となる。レナルが『両インド史』で提唱した「文明化」の理想は、ゲルマニズムを再編しながら、この回帰するローマの影をあらためて振り払い、近代ヨーロッパのもたらした諸「帝国」の地の上に、自律的な政治的共同体を生み出すことを目指すものだったのである。

近世ヨーロッパ宮廷論の射程

大津 留厚
(神戸大学)

しばらく前から、ヨーロッパ近世史研究において宮廷ないし宮廷間の関係の重要性が注目されるようになった。その嚆矢となったのは、オランダの歴史家ドゥインダムの『ウィーンとヴェルサイユ』(Jeroen Duindam, *Vienna and Versailles - The Courts of Europe's Dynastic Rivals, 1550-1780* (Cambridge: Cambridge Univ. Press, 2003)だろう。ドゥインダムの作品はフランス宮廷とハプスブルク宮廷を比較しながらヨーロッパ近世史像の見直しを迫ったものである。

ドゥインダムは「比較」という方法をとっているが、それは近代史的な2分論への大きなアンチテーゼとなっている。アンチテーゼは、例えば宮廷の「私的」な要素と「公的」な要素の分離であり、王室と貴族の分離であり、地方と中央の分離である。その先にあるのは、宮廷を「ナショナルな」歴史の中に組み込んで考える思考法への批判である。

「宮廷」とはそもそも何か。17世紀においては、その共通の解釈は「国王の居わたる所」であり、また「国王と顧問官、廷臣、官吏、御付の者たちの居わたるところ」であった。そこには国王の家政と国家の統治機構が未分離のまま存在していた。その未分離の存在をそのまま捉え、またその場合のフランス王家とハプスブルク家の宮廷を「比較」することで、ヨーロッパ規模での宮廷の歴史的な位置づけを目指したところにドゥインダムの功績があった。

ここではドゥインダムのフランス王家、ハプスブルク家の宮廷論を紹介すると同時に、Christoph Kampmann, Katharina Krause, Eva-Bettina Krems und Anuschka Tischer (Hg.), *Bourbon Habsburg Oranien-Konkurrierende Modelle im dynastischen Europa um 1700* (Köln/Weimar/Wien: Böhlau, 2008)などのその後の研究動向も参照しながら近世宮廷論の現在を考え、それが持つ近代史再考への射程を考えてみたい。

ロシア帝国の形成・発展と西歐的学知の受容

橋本 伸也
(関西学院大学)

中世・近世初期のヨーロッパにとって異境であったロシア（キエフ・ルーシ、モスクワ国家の時代に「ロシア」の呼称を与えるのでは不適切だが、便宜的にこう呼ぶ）が「タタールのくびき」を脱し、分領諸公国への分裂状態を克服して、統一国家を形成するだけでなく、ヨーロッパの一員としての自己意識を抱きつつユーラシア大陸の東西にまたがる巨大帝国としての成長を遂げるためには、超えるべきいくつかの重要な要件があった。イヴァン雷帝のもと東西両方面に向けて繰り広げられた非正教的世界への領土拡張の試み、バルト海や黒海への出口の獲得、こうした課題に耐えうる軍隊の形成などがそれである。そして、それらとあわせて、近世・近代のヨーロッパのあり方を規定したヨーロッパ的学知を共有するために、統治と国力の条件としての「先進的」な知を移入し、その条件としての教育システムを整備することも、必須の課題であった。

ところで、西方教会圏のように中世以来の大学と準備教育機関としてのラテン語文法学校の伝統をもたず、それゆえ体系的な学知の構築を果たさずに来た東スラヴの正教世界が、この二つの課題に本格的に取り組むのは 17 世紀以降のことであるが、そこには性格を異にしたいくつかの課題が存在した。

その一つは、ルネサンスと宗教改革の時代に開花した人文主義的学知の受容である。中世以来 19 世紀にいたる長い時代にわたってヨーロッパ・アイデンティティの核心をなした人文主義は、近世の早い段階でポーランドまで到達していたが、モスクワを中心としたロシアにその影響が本格的に及ぶのは 17 世紀末のことであり、それには、ポーランド統治下でイエズス会と対峙していち早く教会改革に向かったキエフの教会の影響が甚大であった。

いま一つの課題は、17 世紀科学革命や国家論・国際法論の新展開に対応した最先端の知の体系を根付かせるとともに、ロシアをそうした知の発信地に変容させるという課題である。これには、ライプニッツやヴォルフなどの初期ドイツ啓蒙の影響が顕著である。ここには、ヨーロッパ的なものを志向するロシア側の動機とともに、ロシアを介してさらに東方世界に向かおうとするヨーロッパ側の強い意志が介在するのである。

本報告は、こうした二つの知的課題に 18 世紀のロシア帝国がどのように向かいあおうとしたのかを、主として、ロシア帝国による西部国境地域の領有化および、ヨーロッパを範とした学術教育機関創設と知的交流という視点から明らかにするものであるが、同時に、そのことをヨーロッパによる知的覇権の確立という視点から捉え直そうとするものでもある。そのことを通じて、18 世紀研究にロシア史の側からの貢献を果たすことが、本報告の課題となろう。

* 牛貫傑氏の要旨は大会当日配布の予定です。

